

## トルコ人の恩返し（協同組合通信/井戸端論弾）14.11.25

サッカーW杯を戦ったトルコと日本の話である。112年前和歌山県の漁村の人々との記録を友人からのメールで思い起こし、浅からぬトルコとの因縁を想い、試合をテレビ観戦した。

1890年9月16日トルコの木造軍艦「エルトゥールル号」が、折からの猛烈な台風に遭遇し、和歌山県串本沖で沈没。樫野崎沖灯台崖下の「魔の船甲羅」に激突、真っ二つに大破エンジンに浸水し大爆発。この音を灯台守が聞き逃さなかった。

1人の水夫が、全身血にまみれ決死の覚悟で危険な崖をよじ登り救いを求めた。言葉が通じない2人であったが、「モールス信号」で遭難を確認した。灯台守は、暗夜の道を厭わず樫野の村人に急を告げた。

村総出の救助活動が、闇夜を徹して行われた。海面を覆う夥しい遺体に交じり、かすかに息をしている人がいた。村の男達は彼らを抱き起こし、裸になって自らの体で温めた。

遠い異国からきてくれたのに、死なせてはならない。

**乗組員約600名、生存者69名（トルコ大使館のホームページより）**

台風で出漁出来ず、村の食料もほぼ尽きていた。取っておきのニワトリを女達が料理し食べさせた。遺体は大島に丁重に葬った。

遭難の報は、即座に和歌山県知事に伝えられ、明治天皇に言上された。

天皇は、直ちに医者と看護婦を派遣なされた。さらに礼を尽くし、生存者全員を**軍艦二隻**でトルコに送還なされた。

時は移って**イラン・イラク戦争**勃発。1985年3月17日イラク空軍司令部が、イラク全土上空を戦争区域に指定、48時間後より民間機への攻撃を示唆。

多くの日本の会社員と家族が居住していた。テヘラン空港に駆けつけた。

外国航空機は満席。各国は既に自国の救援機等を派遣し救出完了。日本政府は有効な救出が出来なかった。現地はパニックにおちいった。

そこへ**2機のトルコ航空機**が到着した。**日本人215名全員**を乗せ、無事飛び立った。

タイムリミットの1時間20分前。

素晴らしかった無私・無欲の明治の日本人。

その恩を忘れず、95年後に我同胞の救助に駆けつけてくれたトルコの人達。歴史教科書で「エ号」の遭難に関し、献身的な救助活動を今も伝えているという。

（ 気象情報システム株式会社 高津 敏 ）